

本を読む喜び



作家 高田 宏

中学二年生のときでした。ある夕方、父が大きな風呂敷包みを背負って、その重さで前かがみになりながら帰ってきました。

風呂敷包みのなかに、数十冊の本が入っていました。父がぼくのために買ってきてくれた本でした。太平洋戦争が終わってまだ一年ばかりのころです。食べるものにもことかいていた時代のこと、本はぜいたくな貴重品でした。

父は当時古物商をしていました。焼きものなどの骨董品や古着などを売買する仕事です。その日は古物商のあつまる市に、めずらしく世界文学全集がひとそろい出ていて、父が本好きの息子のために思い切って買ったのだそうです。大喜びするぼくを見て、父はにこにこ笑っていました。

この章だけでも一つのすぐれた作品になっています。物語全体の主人公であるジャン・ヴァルジャンはまだ登場していませんが、この老司教の美しい生き方を描き出すことよって、『ユゴーは』レ・ミゼラブル』という大長編小説全体に、やわらかく優しい光をあてているのです。中学生のぼくは物語の本筋のほうに目を惹かれていたのだらうと思いますが、それでも気づかないうちにユゴーの描く理想の生き方に影響を受けていたはず、です。

それだけでも父に感謝しなくてはなりません。父が背負ってきたくれた世界文学全集のおかげで、ぼくは自分を鍛えることができたのです。ダンテの『神曲』やセルヴァンテスの『ドン・キホーテ』、ゲーテの『ファウスト』やドストエーフスキイの『罪と罰』など、世界文学の傑作群に触れることができ、中学生なりに世界を広げ、また深めることができました。

年をとった今になって思うのですが、読書はスポーツと似ています。とりわけ長い作品を読むときは、体力が必要です。老年になって長大な作品を読むときは、当然のことですが体力不足を痛感させられます。ゆっくり少しずつ、休み休み読むしかありません。ですから大きな本はできるだけ若いうちに読むのがいいと思います。

すべての体力を傾けて本と格闘するのは、もちろん体力だけでなく、全知力を投入して読むのです。体力と

その本は、昭和のはじめに出版された新潮社版世界文学全集です。ぼくはそれから毎日、夢中になって一冊また一冊と読みつづけました。おなかが空いても本を読んでいるときは空腹を忘れていました。二段組みでぎっしり字のつまっている本です。むずかしくてよく分からないものもありましたが、そんな巻もあきらめずになんとか終わるまで読みました。

手に汗をにぎりながら引き込まれた巻もあります。たとえば、アレクサンドル・デュマ作『モンテ・クリスト伯』二巻などは、面白くて三回くらい読んだおぼえがあります。ヴィクトル・ユゴー作『レ・ミゼラブル』三巻も、二回か三回読み返しました。

この二作は大人になってからもまた読んでいます。どちらもやはり面白かったのですが、とりわけ『レ・ミゼラブル』にはあらためて深く感動しました。十九世紀フランスの大作家・大詩人であり大政治家でもあったユゴーの理想のすべてがここに投げ入れられています。ジャン・ヴァルジャンと「ゼット」をめぐる物語は文句なく面白いのですが、物語の本筋からはずれた多くの章にも、作者が語り伝えたかったいろいろなのが熱をこめて書かれています。

第一部第一章がその一例です。「正しい人」という題のこの章は、ミリエル司教という人の生涯を描いていて、知力を総動員して相手（本）に挑んでいくと、その先に思いがけない未知の世界がひらけてきます。そのときの喜びはスポーツにもある陶酔感覚です。

ぼくが若いころに、そうやって読み、その後もくりかえし読んで、そのたび、読書の喜びを全身に感じてきた本を、いくつか挙げてみます。もちろん、一つの参考です。みなさんが自分自身で見つける相手（本）もきっとあるはず、です。

まず、スタンダールの『パルムの僧院』です。十九世紀フランスのこの長編小説はぼくに、人間のなかにある崇高な精神を教えてくださいました。これまで十数回読んで、そのたびに心を浄められてきました。優れた小説は何度読んでも新しいものです。読む者の年齢によっても、それまで気づけなかった新しい魅力を見せてくれます。若いうちに生涯にわたって読み返すことのできる本を見つけておけば、それはまさに一生の宝となります。

そのほか若い人たちにすすめたい大長編小説をいくつか順不同に挙げておきます。

ドストエーフスキイ作『カラマーゾフの兄弟』
子供たちを描くことで人間への深い信頼が語られています。

マルタン・デュ・ガール作『チボー家の人々』
戦争の時代を生きた人びとの誠実な心が描かれて

